

加賀検定

第10回 加賀ふるさと検定試験問題

上級 (全60問)

解答・解説付

2022年12月18日

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会

各問題に対して、それぞれ①～④までの選択肢の中に正解が1つあります。解答用紙に、正解と考える番号を1つだけ○で囲って下さい。(黒色のエンピツもしくはボールペンを使用のこと)

1 加賀市の方言で、農村部の民家の広い居間を「オエ」、仏壇を置いた座敷を「デイ」、寝室として使った部屋を「ナンド」、便所を（ ）と称していた。

- ①センチャ ②カワヤ ③シモノマ ④フジョウマ

正答率 94.1%

村方の民家では、母屋とは別棟に、「センチャ」とよばれる外便所がありました。全国的には便所のことを「雪隠」(せっちん)あるいは「厠」(かわや)などと呼ばれていましたが、加賀を含めて北陸地方では、この雪隠が転化してセンチャになったと考えられています。

2 蚊などの害虫を防ぎ、夏の風物詩でもある蚊帳の布地は、古くは主に（ ）を使用した。

- ①綿 ②茅萱 ③麻 ④絹

正答率 47.1%

昭和30年頃までは、夏の夜、寝室に蚊帳を吊って寝ました。蚊帳は風を通しながら蚊などの害虫は通さないで、窓を開け外気を入れながら寝ることができました。古くより、蚊帳の素材は主に麻が使われてきましたが、その後、レーヨンやナイロンなどの化学繊維を素材とする蚊帳も登場するようになりました。

3 昭和30年代頃まで、雨の日や強い日照りの時は、イグサを原料とした（ ）を着用する人が多くみられた。

- ①被り莫蓆 ②着莫蓆 ③蛇の目莫蓆 ④背当て莫蓆

正答率 88.2%

雨の日や雪の日は、合羽(かっぱ)が普及するまでは、カケゴザ(掛莫蓆)やキゴザ(着莫蓆)を着用しました。着莫蓆は、雨天だけでなく、強い日差しを避けるときも使われました。素材のイグサは主に九州地方で生産されていますが、おとなりの小松市もイグサの生産地として知られています。

4 江沼三山を高い順に並べると（ ）番となる。

- ①大日山 - 鞍掛山 - 富士写ヶ岳 ②富士写ヶ岳 - 大日山 - 鞍掛山
③大日山 - 富士写ヶ岳 - 鞍掛山 ④富士写ヶ岳 - 鞍掛山 - 大日山

正答率 94.1%

大日山の標高は1,368mで、加賀市では最も高い山です。富士写ヶ岳は942m、鞍掛山は478m。この大日山・富士写ヶ岳・鞍掛山の3山は、加賀・江沼の人々が古来より特に親しんできたことから「江沼三山」と呼ばれています。

5 動橋町の振橋神社には、昔、村内に毒蛇がいて、娘たちを奪っていくことがあり、住民を苦しめていたが（ ）が退治したという伝承がある。

- ①オオナムチノカミ ②オオヒコノミコト ③イザナミノミコト ④スサノオノミコト

正答率 70.6%

動橋町の振橋神社には、「昔、毒蛇が住んでいて、深夜、年頃の女の子を奪っていくことがあり、人々は大変恐れていました。たまたまこの地を通り過ぎた大己貴神(オオナムチノカミ)は民が苦しむ姿を見て、すぐにこれを退治した」という伝承があります。この伝承に基づいて、現在の「ぐず焼き祭り」が行なわれるようになりました。なお、オオナムチノカミは「オオクニヌシノミコト」の異称です。

6 加賀市には、ため池が多く、() のような止水性のトンボを多く見かける。

- ①ハグロトンボ ②オニヤンマ ③ギンヤンマ ④ムカシトンボ

正答率 70.6%

加賀市にはため池が多いためかギンヤンマなどの止水性トンボが見られます。近年各地にビオトープが設置されているため、止水性トンボは増える可能性があります。ただし、バス・ギル・コイなどが放流されると幼虫が食われ、止水性トンボは減ってしまう危険性があります。

7 ブナクラス域(夏緑広葉樹林帯)は、あまり人が立ち入らない地域で、そこにはブナ、トチノキ、ミズナラ、() などが多く見られる。

- ①ツツジ ②スダジイ ③ユリ ④イヌシデ

正答率 23.5%

ブナクラス域の特徴は、ブナに代表されるように、春には葉を開き、秋に紅葉、落葉する木で構成された林が特徴です。ミズナラやイヌシデ・トチノキ・サワグルミなどの林も見られます。イヌシデは建築資材や椎茸をつくる際の原木としてよく使われます。

8 加賀地方で使われてきた方言「どくしょな」とは、主に() という意味で使われていた。

- ①薄情な ②ものしり ③利口な ④素晴らしい

正答率 47.1%

「どくしょな」は、金沢や加賀で広く使われた方言で、「気の利かない」あるいは「薄情な」「情けない」などという意味です。この方言をまったく知らない他県からは、「読書家」だと褒められたように勘違いする人もいたとか。「りくつな」の反対語になります。

9 大聖寺川河口の国指定天然記念物、鹿島の森には、アカテガニや() などの珍しい動物が生息している。

- ①ノミハマグリ ②ツルガマイマイ ③ヤマトシジミ ④カバサクラガイ

正答率 100%

国の天然記念物「鹿島の森」は、数百年来、斧が入ることがなく、そのため、常緑広葉林が生い茂り、原生林のままの植生を残しています。また、動物ではアカテガニ やツルガマイマイなどの珍しい生物が現在も生息しています。ツルガマイマイは主に京都府や福井県で生息するカタツムリですが、近年では稀少生物となっています。

10 縄文時代早期の柴山水底貝塚からは、県内最古の人骨や関西の影響を受けた() が多数出土している。

- ①加曾利式土器 ②星田式土器 ③大川式土器 ④北白川式土器

正答率 100%

柴山水底貝塚は、柴山洪積台地を背後に控えた柴山潟湖湖畔に位置し、無数の貝類のほか、土器片、人骨、獣骨、貝輪等が出土しました。土器は京都府の白川扇状地に展開する乙訓地域の遺跡から出土する縄文時代前期の標準土器である北白川式土器の影響を受けた土器形式で、これからこの遺跡が縄文時代早期から前期にかけての貝塚であることが判明しました。

11 藤の木遺跡からは、北陸の標式土器である()・古府式土器・大杉谷式土器のほか、東海・近畿・関東系土器が発見され、東西文化の接点であったことを示している。

- ①遠賀川式土器 ②長原式土器 ③上山田式土器 ④田戸式土器

正答率 88.2%

藤の木遺跡からはかほく市上山田貝塚から出土した北陸の標式土器である上山田式土器を初め、古府式土器・大杉谷式土器に混じり、東海・近畿系土器や関東系土器等と、県内最多の縄文時代中期の土器が出土しており、また石器では中京系の石斧や和田山産の黒曜石製の石刃もあり、この遺跡が東西文化の接点であったことを示しています。

12 「北陸の登呂遺跡」とも称される猫橋遺跡から出土した土器の形から、()との結びつきが極めて強いことが分かった。

- ① 関東文化圏 ② 中京文化圏 ③ 山陽文化圏 ④ 山陰文化圏

正答率 88.2%

猫橋遺跡から出土した土器は、「猫橋式」と呼ばれ代表的な標式土器となっていますが、特に猫橋Ⅱ式は島根県出雲市知井宮遺跡出土の知井宮Ⅱ・Ⅲ式とよく類似しており、山陰地方との結びつき極めて強いと判断されています。

13 弥生後期から古墳後期の^{おおすがなみ}大菅波A遺跡からは多数の^{すえき}須恵器が発見された。これらの須恵器は()から運ばれたと推定され、関西との強い結びつきが想定される。

- ① 牛頸窯跡群 ② 陶邑窯跡群 ③ 猿投窯跡群 ④ 湖西窯跡群

正答率 58.8%

大菅波A遺跡は、弥生時代後期から古墳時代後期の^{おおすがなみ}大集落跡で、溝跡から県内沙汰の土器が出土し、土師器に混じって県内最古の須恵器もあり、これは大阪府の陶邑窯跡群からの搬入品と考えられています。

14 富塚丸山古墳は、半壊し直系70m程度の規模であるが、大型の前方後円墳であった可能性も指摘されている。江戸時代に村人が甲冑や刀剣・()等を出土したと伝わる。

- ① 銅鏡 ② 帯金具 ③ 勾玉 ④ 形象埴輪

正答率 41.2%

富塚丸山古墳は、現在周囲を削られて直径70m規模となっていますが、江戸時代に甲冑や刀剣・勾玉等の副葬品が出土したと伝えられています。前方後円墳であった可能性もあり、もしそうならば、全長120m以上の大きさとなり、手取川以南のこの時期では最大級の古墳で、南加賀全体に君臨した権力者の墓だった可能性があります。

15 寛治5年(1091)、加賀守藤原為房は、加賀国府から帰京に際し、()を中継点として敦賀津まで向かったと日記に記録している。

- ① 安宅湊 ② 本吉湊 ③ 潮津駅 ④ 淡津泊

正答率 100%

寛治4年(1090)6月5日、藤原家通の替わり、加賀守に就任した防鴨河使左少弁藤原為房の日記『為房卿記』によれば、翌5年6月15日に任国に赴き、国事行為を行った後、7月19日に乗船し淡津泊を経て20日に敦賀津に着き、23日に帰洛しています。この淡津泊の所在地については、現在の木場潟付近だとか栗津町周辺、あるいは加賀市の塩屋・瀬越付近ではないかといくつかの説があります。

16 熊坂庄の地頭職を領有した大見実泰は、文永10年(1273)、この庄の領家であった()の預所と争い、領家と地頭で土地を折半する「和与中分」を行なった。

- ① 西園寺家 ② 徳大寺家 ③ 三条西家 ④ 園家

正答率 94.1%

弘安10年(1287)の関東下知状によると、文永10年(1273)に、「承久の乱」を機会に熊坂庄の地頭職を領有した大見実泰と当時の領家であった徳大寺家派遣の預所とが係争となり、領家と地頭との間で、下地を中分(折半)する条件で、和与(示談)となり、幕府も承認したことを伝えています。

17 元弘3年(1333)、後醍醐天皇の倒幕運動に足利高氏(尊氏)が加担すると、加賀国福田庄()惣領地頭の狩野頼広も能美郡の国人らと共に参陣した。

①南郷

②諸田郷

③菅浪郷

④山代郷

正答率 76.5%

後醍醐天皇の倒幕運動に同調した足利高氏が鎌倉幕府を離反し、京の六波羅探題の滅亡、越中守護所の放生津館の炎上を機に、加賀国福田荘菅浪郷惣領地頭兼菅生社神主狩野頼広が、同国府南社御供田地頭建部頼春・同国八幡一分地頭八幡尚成と共に足利高氏に参陣し、新政府に属したことを示しました。

18 加賀国の北野天満宮領の富墓荘は、室町時代中期には宮寺領とは名目だけで、地元の武士に侵害され、わずかに公家の（ ）が権益の一部を保有するだけになっていた。

①久我家

②菅原家

③高辻家

④持明院家

正答率 82.4%

富墓荘の伝領関係については、高辻家の領有権が先行し、後に北野宮寺領に繰り入れられたものか、或いは北野宮寺領として成立し、後に高辻家が荘務職を入手したものかは不明ですが、北野松梅院の権利は、現実に荘務を支配するのではなく、荘務を知行する高辻家から社納分百石の送付を受ける程度になっていました。

19 15世紀以降、額田庄・八田庄では、（ ）の流れをくむ中院通世・通胤・通為の3代が約65年間にわたり荘園を直接経営した。

①嗟峨源氏

②仁明平氏

③村上源氏

④文徳平氏

正答率 94.1%

額田庄・八田庄は、家祖となる中院家の通方が後鳥羽上皇より安堵された荘園で、15世紀頃より、中院通世、道胤、通為の3代がおおよそ65年間にわたって荘園を直接支配しました。中院家は村上源氏の久我家支流にあたる華族で中世から近代まで続いた名家です。

20 文明18年(1486)、京都の聖護院門跡（ ）が越前から加賀に入り、白山禅定道へと向かった。その行程が紀行文『廻国雑記』に記録されている。

①道興

②増誉

③道晃法親王

④道澄

正答率 47.1%

文明18年(1486)6月、聖護院門跡道興は、聖護院末寺の掌握を目的に東国廻国の旅に出て、越前から加賀に入り、橘宿に一泊した後、敷地・弓浪・動橋等を経て白山禅定道へと向かったと紀行文『廻国雑記』に詳細に記録しています。

21 山口宗永(玄蕃頭)は、千利休に茶の湯を学び、（ ）の年寄衆や毛利輝元・小早川隆景などと茶会を開き、能楽にも通ずる当時の文化人であった。

①京都

②大坂

③博多

④堺

正答率 88.2%

小早川秀秋が慶長3年(1598)4月に豊臣秀吉の命により越前北庄城主に移されたとき、秀秋の筆頭家老山口宗永は、秀吉の直臣に転じて大聖寺城主となり、江沼郡7万石を支配しました。宗永は山城国(京都府)の出身で、理財の道に優れ、また千利休に茶の湯を学び、博多の年寄衆や毛利輝元・小早川隆景などと茶会を開き、能楽にも通ずる当時の文化人でした。

22 慶長5年(1600)8月3日の大聖寺合戦では、前田軍の（ ）の家臣が鐘ヶ丸の戦いで多く戦死したため、現在の錦城中学校前の住宅地に「四墓」が立てられた。

①高山右近

②太田長知

③横山長知

④長連龍

正答率 94.1%

金沢城主前田利長は、慶長5年(1600)8月3日に大聖寺城主の山口玄蕃宗永親子を攻め滅ぼしました。この大聖寺合戦で山口軍は、1200人のうち約800人の家臣が討ち死にしました。利長軍の中では、鐘ヶ丸の戦いで長連龍の家臣が多く戦死しました。その家臣の墓は、いまでも錦城中学校前の住宅地に「四墓」として残っています。

- 23 大聖寺藩祖前田利治は、九谷村や熊坂村に金山を、() に銀山を開発するとともに、九谷焼の製造や山中漆器の保護など殖産興業にも力を注いだ。
- ①今立村 ②荒谷村 ③曾宇村 ④那谷村

正答率 94.1%

大聖寺藩祖前田利治は、藩の政治組織を整えるとともに、九谷村や熊坂村に金山を、曾宇村に銀山を開発しました。また、九谷焼の製造や山中漆器の保護など、殖産興業にも力を注ぎ、大聖寺城下町の基礎を築きました。2代前田利明も市之瀬用水の大改修、新川の開鑿、檜・竹の栽培、茶の栽培、流骨車の導入、時鐘の鑄造など行いました。

- 24 万治3年(1660)4月大聖寺藩祖前田利治が江戸で死去したとき、中沢・小沢・小栗の家臣3人が殉死(追腹)したが、このうち小沢三郎兵衛は()で自害した。
- ①宗英寺 ②久法寺 ③全昌寺 ④寛慶寺

正答率 64.7%

大聖寺藩祖前田利治は、万治3年(1660)4月21日に江戸で死去したとき、中沢久兵衛(35歳)、小沢三郎兵衛(49歳)、小栗権三郎(22歳)の3人が殉死(追腹)しました。小沢は4月27日に信州(長野県)善光寺に隣接する寛慶寺で、中沢は5月3日に全昌寺で、小栗は5月2日に久法寺でそれぞれ自害しました。彼らの墓は、いまも実性院にある藩祖利治の墓の後方に建てられています。

- 25 大聖寺藩の十村を代々務めた者には、小塩辻村の鹿野小四郎、右村の堀野新四郎、()の荒森宗左衛門、動橋村の橋本平四郎などが知られる。
- ①分校村 ②保賀村 ③山代村 ④山中村

正答率 41.2%

大聖寺藩の十村(大庄屋)には、十村組を有する組付十村と、それを監視する目付十村(手振十村)の2種がありました。小塩辻村の鹿野小四郎、右村の堀野新四郎、保賀村の荒森宗左衛門、分校村の和田半助、動橋村の橋本平四郎、島村の和田五郎左衛門、日末村の松原間兵衛などは代々十村役を務めました。

- 26 大聖寺藩の御用抄(御用薪)は、領内三谷・西谷・東谷・那谷地区の村々などで生産されたが、その値段は江戸中期()地区の村々が最も高かった。
- ①三谷 ②西谷 ③東谷 ④那谷

正答率 58.8%

大聖寺藩の山間部では、日用品だけでなく御用品の薪炭も多く生産しました。御用抄(御用薪)は東谷・西谷・三谷地区の村々で多く生産されましたが、その値段は元禄期(1688~1703)に東谷抄100束が7匁8分、西谷抄100束が6匁4分、三谷抄100束が5匁3分で、3地区で異なっていました。大聖寺城下からの距離に応じて値段が異なったようです。

- 27 橋立・瀬越・塩屋の北前船主は、北海道松前で活躍した()が所有した荷所船の沖船頭や水主として雇われたが、宝暦・天明期(1751~88)にはほぼ独立した。
- ①江戸商人 ②大坂商人 ③近江商人 ④伊勢商人

正答率 23.5%

北前船とは、北国の船で日本海から瀬戸内を通過して大坂や兵庫などに廻航する買積船(各地で商売する商船)です。橋立・瀬越・塩屋村の北前船主らは、北海道の松前で活躍する近江商人が内地との連絡に用いた荷所船の沖船頭や船乗りとして雇われ、やがて、北前船主として独立したと言われています。

28 大聖寺藩主 9 代前田利之治世の財政収支は、藩主在国年・藩主在府年とも大きな赤字が出たが、とくに藩主在府年の赤字は莫大で、年間に銀（ ）貫匁余の赤字となった。

- ① 129 ② 179 ③ 191 ④ 279

正答率 76.5%

大聖寺藩主 9 代前田利之治世の財政収支は、藩主在国年の収入が銀 733 貫 239 匁、収出が銀 827 貫余で銀 93 貫 795 匁 5 分の不足となり、藩主在府年の収入が銀 733 貫 239 匁、支出が銀 924 貫 793 匁 6 分で、銀 191 貫 554 匁 4 分 6 厘（金 2993 両）の不足となりました。このように、藩財政は藩主在国で銀 93 貫 700 匁余（金 1500 両）、藩主在府年で 191 貫匁余（金 3000 両）の赤字が出ました。

29 大聖寺町の豪商、5 代吉田屋伝右衛門は、文政 8 年（1825）7 月に同町の町人米屋次郎作とともに吉田屋窯を九谷村から（ ）の越中谷に移した。

- ① 山代村 ② 山代新村 ③ 長峰村 ④ 中野村

正答率 17.6%

大聖寺町の豪商、5 代吉田屋伝右衛門は、文政 6 年（1823）に若杉窯の陶工粟生屋源右衛門を招き、奥山方の九谷村で「吉田屋窯」を開きました。吉田屋窯は物資の運搬が不便であったため、わずか数年で閉窯となりました。同 8 年 7 月には大聖寺町の町人米屋次郎作とともに吉田屋窯を中野村（山代出村）の越中谷へ移し、1 年余の準備期間を経て翌年 8 月に開窯しました。

30 西出源蔵は大聖寺藩主（ ）の命を受け、嘉永 5 年（1852）に金沢の野町で吹屋の村山四郎兵衛らとともに大砲 3 挺を鑄造した。

- ① 前田利極 ② 前田利平 ③ 前田利義 ④ 前田利鬯

正答率 76.5%

大聖寺藩では、文政 8 年（1825）の異国船打払令の発令を契機に塩屋・橋立・日末海岸の 3 カ所に御台場を築造しました。12 代藩主前田利義の命をうけた西出源蔵は、嘉永 5 年（1852）に金沢の野町において吹屋の村山四郎兵衛らとともに大砲 21 中 3 挺を鑄造しました。これ以前、西出源蔵は同 3 年に塩屋御台場係り主任を務めていました。

31 大聖寺藩士東方芝山は、幕末、藩主の厚い信任を得て藩の政局に大きな影響力をもった。また、著書も多くあるが、現存するものは少なく、その代表的なものに（ ）がある。

- ① 九経談 ② 悟窓漫筆 ③ 勸農文 ④ 本草秘録

正答率 11.8%

大聖寺藩士、東方芝山は、加賀藩儒学者の林蓀坡や江戸の安積良斎などに学び、また、京都で絵画や書・漢詩を学ぶなど、博学多芸で知られていました。幕末においては、特に最後の藩主利鬯の信任が厚く、大聖寺藩の藩政改革を提言しました。芝山は多数の著書を遺しましたが、現在、残っているものは少なく、その代表的な書物として『勸農文』があります。

32 大聖寺の医師稲坂謙吉は、明治元年（1868）加賀藩の卯辰山養生所に入学し、医学をオランダ人軍医の（ ）などから学んだ。

- ① シーボルト ② スロイス ③ ベルツ ④ ポンペ

正答率 17.6%

医師稲坂謙吉は富山県下新川郡朝日町生まれで、謙吉の父は黒川良安の弟です。明治元年卯辰山の養生所に入学し医学をオランダ人軍医のドクトル・スロイスやホルトマンから学び、卒業後は金沢病院に勤めました。明治 12 年に江沼郡にコレラが流行したことで江沼郡出張、これが縁で金沢病院大聖寺分病院の初代院長となりました。

33 大聖寺藩士渡辺卯三郎は蘭学の基礎を（ ）から学んだ。その後、大坂の緒方洪庵の適々齋塾に入門し、第 7 代目の塾頭となった。

- ① 黒川良安 ② 田辺明庵 ③ 馬島健吉 ④ 畑 久治

正答率 76.5%

大聖寺藩士渡邊卯三郎は幼少より槍術、剣術、馬術を好くし、また漢詩を好み、儒学を東方芝山に学びました。また、蘭学については芝山のすすめで金沢の蘭医黒川良安について学びました。嘉永元年には、志を立てて大坂に出て、当時有名な蘭学者緒方洪庵の適々齋塾に入門し、ついには塾頭まで努めました。

34 大聖寺町の初代町長を務めた梅田五月は、幕末、() で砲術や洋学を学び、帰藩後は藩学校の兵学教師を勤めた。

- ①小浜藩 ②福井藩 ③大野藩 ④丸岡藩

正答率 47.1%

大聖寺藩士梅田五月は大野藩で砲術や剣術、洋学などを4年間にわたって学び、帰藩しました。帰藩後は、藩学校の兵学教師を勤め、その後、県会議員や衆議院議員、大聖寺町長などを歴任しました。

35 大聖寺の陶芸家、初代中村秋塘は、父から陶画を学び、のち竹内吟秋に師事し、赤絵細描の名手となり()の技法をあみだした。

- ①色絵金襴手 ②千筋刷毛目 ③砒質手 ④釉裏金彩

正答率 17.6%

大聖寺の陶芸家中村秋塘は父から陶画を学び、明治10年、家業を継ぎました。その後、竹内吟秋に師事し陶技を修得し、赤絵細描の名手となり、「砒質手」の技法を編み出しました。砒質手は、絵の具がいくつかのガラス層により淡く透けて見える独特な技法で、秋塘以外の作家では再現が難しいといわれています。

36 大聖寺魚町の御用商人()は、大聖寺藩の産物御用達を務め、明治3年には和船濤静丸を藩から払い受け、自身の持ち船として北前船稼業に乗り出した。

- ①吉崎屋嘉兵衛 ②林清一 ③中木伊三郎 ④瀧川幸太郎

正答率 17.6%

大聖寺魚町の有力商人藩の林清一は、藩への多額の献金により明治元年、帯刀を許されました。また、同3年には1700石の日本型静濤丸を藩から払い下げを受け、自身の持ち船として北前船稼業に乗りだしました。現在、菅生石部神社にはこの濤静丸を描いた船絵馬が奉納されています。

37 蓮如は、浄土真宗本願寺第7代法主存如の長庶子として出生し、永禄3年(1431)天台宗の()において得度した。

- ①三千院 ②滋賀院 ③青蓮院 ④曼殊院

正答率 82.4%

蓮如が誕生した頃の本願寺は、真宗諸派の中でも教線が最も衰退していた時代で、本願寺は天台宗の門跡寺院青蓮院の末寺となっている状態でした。そのため、蓮如も中納言広橋兼郷の猶子となって青蓮院で得度し、中納言兼寿と名乗りました。

38 大聖寺藩3代藩主前田利直は、宝永6年(1709)に藩邸北隅の大聖寺川に面して長流亭を建造したが、この時期、幕府の()となっていたためほとんど江戸に住んだ。

- ①奥詰 ②側用人 ③若年寄 ④老中

正答率 88.2%

奥詰は5代将軍綱吉の時代と幕末のみ設置された幕府の職制です。両者は職務内容が全く異なり、前者は元禄2年(1689)3月～宝永6年(1709)正月まで設けられ、譜代大名・外様大名の中から10名を任命し、隔日交代で登城し、江戸城山水之間に詰め、将軍の諮問に応じました。利直は家督相続前の元禄4年に奥詰に任命されており、将軍綱吉の信頼も厚かったようです。

- 39 大聖寺藩新田藩主前田利昌としまさは、宝永6年（1709）上野寛永寺うえのかんえいじでの將軍徳川綱吉つなよしの法会ほうえに際し接待役となったが、同役の（ ）藩主織田秀親おだひでちかを刺殺しきつし、切腹せつぷくを命じられた。
- ①大和芝村藩やまとしばむらはん ②大和柳本藩やまとやなぎもとほん ③大和郡山藩やまとこおりやまはん ④大和高取藩やまとたかとりはん

正答率 100%

前田利昌は、大聖寺藩2代利明の4男で通称采女。元禄5年（1692）兄利直から新田1万石を与えられ大聖寺新田藩主となりました。宝永6年（1709）上野寛永寺での將軍綱吉の法会に際し、中宮使の接待役となりましたが、大准后使接待役の大和柳本藩主織田秀親を同寺塔頭顕性院で刺殺し、切腹を命じられました。原因は織田信秀が家系を誇り、利昌を青二才と侮ったことが原因だと言われています。

- 40 大田錦城おおたきんじょうは、大聖寺藩医（ ）の7男で、儒学を志し、独学で清の考証学せつちゅうがくを採り入れた折衷学派せつちゅうがくはを打ち立てた。
- ①草鹿玄仲くさかげんちゅう ②竹内見庵たけうちけんあん ③樫田玄覚かしだげんかく ④野崎玄省のざきげんしょう

正答率 58.8%

大田錦城は藩医樫田玄覚の7男で、大聖寺新町で誕生しました。兄は藩医で漢学者でもあった樫田順格（北岸）。幼少期に大田家に養子に入ったと考えられますが、その詳細は分かっていません。錦城は、初め山本北山に入門しましたが、その後、多紀桂山との交流を深めながら、独学で折衷学派を大成しました。

- 41 大聖寺藩士小塚藤十郎こづかとうじゅうろうは、松奉行として人生を海岸線の松植林事業に捧げ、天保15年（1844）には、藩の地誌（ ）を完成させた。
- ①藩国見聞録はんこくけんぶんろく ②加賀江沼郡雑記かがえぬまぐんざつき ③秘要雑集ひようざつしゅう ④加賀江沼志稿かがえぬましこう

正答率 88.2%

大聖寺藩士小塚藤十郎は、文政7年（1824）植物方奉行に、翌年松奉行に就任し、領内沿岸地域の飛砂を防止するために松の植樹を行いました。また中断していた『加賀江沼志稿』の編纂事業を再開し大著を完成させました。なお、『藩国見聞録』藩士奥村永世の著、『加賀江沼郡雑記』は宮永桂亭の著、『秘要雑集』は著者不詳です。

- 42 京都の陶工永楽和全えいらくわぜんは、慶応元年（1865）大聖寺藩の要請を受けて来藩し、九谷本窯や（ ）で窯業技術の指導を行った。
- ①民山窯みんざんかま ②春日山窯かすがやまかま ③蓮台寺窯れんたいじかま ④小野窯おののかま

正答率 58.8%

永楽和全と大聖寺藩の関わりは万延元年（1860）に藩命で木崎万亀が京都で和全に師事したことに始まります。帰郷した万亀は山代の木崎窯を春日山（山代春日山窯）に移しましたが、藩は領内の産業の一つである九谷焼の再興を図り、宮本屋窯を買収して九谷本窯と称しましたが、技術面で行き詰まったため、指導者として万亀の師である永楽和全を招くこととしました。

- 43 大聖寺「山の下寺院群」の一つで、作家深田久弥ふかたきゅうやの墓がある本光寺ほんこうじは（ ）の寺院である。
- ①浄土宗じょうどしゅう ②曹洞宗そうとうしゅう ③日蓮宗にちれんしゅう ④法華宗ほっけしゅう

正答率 29.4%

大聖寺下屋敷から神明町までの一帯は、「山の下寺院群」と呼ばれ、実性院（曹洞宗）・蓮光寺（日蓮宗）・久法寺（法華宗）・全昌寺（曹洞宗）・正覚寺（浄土宗）・宗寿寺（日蓮宗）・本光寺（法華宗）の7寺院と神明宮の1神社が並んでいます。これは藩政初期に大聖寺藩が越前との国境付近に、意図的に寺社を集めたものといわれています。

- 44 大聖寺藩では、武士の鍛錬たんれんのために片野鴨池の周辺で鴨や雁などを捕る坂網とが行われ、江戸後期には、矢竹で作ったY字形で、長さ約（ ）の坂網を用いて捕獲した。
- ①2.5m ②3.5m ③4.5m ④5.5m

正答率 23.5%

大聖寺藩には、江戸後期に坂網猟の坂網を投げ上げる「坂場」が670か所余もありました。坂網猟は矢竹で作ったY字形で長さ約3.5mの坂網を用いて鴨や雁などを捕獲するもので、元禄年間(1688~1704)に大聖寺藩士村田源右衛門によって始められたと伝えられています。現在、これは毎年、11月15日から2月15日までの3か月間、片野鴨池周辺の坂場で行われています。坂場は毎年、くじ引きをして決めています。

- 45 敷地天神社に御神宝の蒔絵角赤手筥と御神楽代を寄進した珠姫は、徳川秀忠の2女で大聖寺初代藩主前田利治の母にあたり、その法号は()と称した。
- ① 芳春院 ② 玉泉院 ③ 光現院 ④ 天徳院

正答率 94.1%

加賀藩主3代前田利常の夫人天徳院は、元和5年(1619)に敷地天神社に御神宝の蒔絵角赤手箱と御神楽代を寄進しました。利常の夫人は2代将軍徳川秀忠の2女珠姫で、法号を天徳院と称しました。手箱は珠姫が婚礼の際に持参した婚礼調度品の一つ、化粧道具や身の回りの品々を納めたものであり、現在は国指定文化財として東京国立博物館に保管されています。

- 46 菅生石部神社には、大聖寺藩主()の娘で加賀藩主11代前田治脩の正室となった法梁院が寄進した「白紋縺子地水仙唐花丸文様縫小袖及白絹」がある。
- ① 前田利道 ② 前田利精 ③ 前田利物 ④ 前田利考

正答率 41.2%

菅生石部神社(延喜式内社、加賀国の二宮)は、古来より朝廷の崇敬が厚く、中世以降も武将らの信仰が寄せられ、江戸時代には加賀・大聖寺両藩の氏神として崇敬を受けていました。大聖寺藩主5代前田利道の娘で加賀藩主11代前田治脩の正室となった法梁院が寄進した「白紋縺子地水仙唐花丸文様縫小袖及白絹」もその一つです。

- 47 大聖寺城下町の西端に置かれていた大聖寺関所は、明治2年(1869)に宗寿寺の檀家であった家老()の口利きで同寺の境内に移された。
- ① 佐分氏 ② 村井氏 ③ 生駒氏 ④ 神谷氏

正答率 82.4%

大聖寺関所は寛永16年(1639)の大聖寺藩分藩以前に加賀藩によって大聖寺城下町の西端(現在の大聖寺関町)に置かれ、分藩以後は大聖寺藩が管理してきました。加賀藩は同関所を越中国の境関所とともに二大関所として重視し、実質的支配を行っていました。同関所は、明治2年(1869)に宗寿寺の檀家であった家老生駒一彦の口利きで同寺の境内に移されました。

- 48 大聖寺藩の史学・地誌では、享和3年(1803)に塚谷沢右衛門が領内の名所旧跡や神社仏閣の口碑伝説などを記録した()を完成させた。
- ① 芟蕪紀聞 ② 藩国見聞録 ③ 秘要雑集 ④ 加賀江沼志稿

正答率 82.4%

大聖寺藩の史学・地誌では、『芟蕪紀聞』『藩国見聞録』『加賀江沼志稿』はじめ、『秘要雑集』『江沼郡雑記』など多くの著書が編纂されました。このうち『芟蕪紀聞』(領内の名所旧跡、神社仏閣記)は享和3年(1803)に塚谷沢右衛門が著述したもので、大聖寺藩の歴史を研究する上で大変貴重な資料となっています。

- 49 明治11年(1878)におこなわれた明治天皇の北陸巡幸は、8月30日に東京を出発し、江沼郡入りをしたのは()6日のことであった。
- ① 9月 ② 10月 ③ 11月 ④ 12月

正答率 94.1%

明治11年の明治天皇の北陸道巡幸は、右大臣岩倉具視や参議大隈重信らを従え、総勢798人という空前の人数で行なわれた。富山(当時は石川県)に入ったのは9月28日で、その後、金沢に3日間滞在し、10月6日に小松の串茶屋を経て、動橋、大聖寺に入りました。

50 明治12年(1879)の「大聖寺博覧会」は、錦城小学校と()の2カ所を会場にして、15日間にわたって盛大に開催された。

- ①江沼神社 ②遷明中学校 ③願成寺 ④江沼物産館

正答率 94.1%

明治12年(1879)の4月から5月にかけて開催された「大聖寺博覧会」の会場は、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校の2ヶ所が使われました。遷明中学校は、明治11年6月に大聖寺八間道に設置された中学校ですが、同19年に廃校となりました。

51 片山津温泉の開湯は、明治15年(1882)に()郡の観音堂村から招いた井戸掘りの森仁平が源泉掘削に成功したことに始まる。

- ①羽咋 ②鹿島 ③石川 ④河北

正答率 82.4%

片山津温泉は、明治9年(1876)に、当時、県の役人であった近藤幸即らが柴山湯で大規模な埋め立て工事を行ない、さらに同15年(1882)6月には、石川郡観音堂村から井戸掘りの森仁平を招き、特殊な工法で掘削し、湯量を確保することに成功しました。

52 加賀温泉郷を結ぶ路線のすべてが馬車鉄道から電車に切り替わったのは大正元年のことであったが、以後、この電車は「温電」の名前で昭和()まで地域に愛され続けた。

- ①8年 ②17年 ③22年 ④28年

正答率 29.4%

大正元年(1912)9月それまでの山中馬車鉄道は電化され、山中電気軌道と社名を改めました。これを機に、山代や片山津の各鉄道馬車も温泉電気軌道株式会社として運営が一元化され、加賀温泉郷を結ぶ路線すべてが電車に切り替わりました。以後、この電車は、昭和17年(1942)に北陸鉄道加南線が誕生するまでの約30年間にわたって「温電」の名前で愛され続けました。

53 明治10年(1877)、片野鴨池や坂網獵の管理をするために、士族()らが中心となって江沼郡捕鴨業組合が結成された。

- ①東方芝山 ②前田 幹 ③飛鳥井清 ④生駒一彦

正答率 88.2%

明治維新後、それまで武士階級のみにも認めていた坂網獵が、誰でも自由になったことで坂場の使用などで争いが生じました。そのため明治10年、旧藩士飛鳥井清らが中心となって「江沼郡捕鴨業組合」が組織され、鴨池および坂場の管理を行なうことになりました。なお、この組合は昭和22年には「大聖寺捕鴨獵区協同組合」に名称が変更されました。

54 政府はGHQの指令に基づき、昭和22年に農地改革を実施した。これにより江沼郡では、小作地が23.2%あったものが、約()%に減少した。

- ①6 ②8 ③10 ④12

正答率 88.2%

農地改革により、石川県では1万299町歩の農地が地主から買収されました。この面積は、小作地総面積75.4%に当たります。江沼郡でも1081町歩の農地が、延べ5710戸の地主から買収され、その結果、小作地は23.2%から8%に減少しました。

55 明治25年(1892)の江沼郡役所の歳出を見ると、役場費・土木費・教育費・衛生費・勸業費など合計39,204円で、この内()費は全体の46%を占めていた。

- ①土木 ②教育 ③衛生 ④勸業

正答率 100%

明治25年の江沼郡全体の予算規模を見ると、歳入は国庫交付金や県税交付金、町村税、郡費などで合計約4万819円。一方、歳出は役場費、土木費、教育費、衛生費、救助費、警備費、勸業費などで、合計約3万9204円となっています。このうち、小学校や夜学校の経営などに充当する教育費は歳出全体の約46%を占めてもっとも比率が高くなっています。

56 江沼郡では、町村合併促進法に基づき、昭和29年（1954）3月、県内トップをきって大聖寺町が瀬越村を編入、続いて片山津町が（ ）村を編入した。

- ①柴山^{しばやま} ②塩津^{しおつ} ③篠原^{しのほら} ④作見^{さくみ}

正答率 76.5%

昭和29年3月、町村合併促進法の制定を期に、江沼郡では、県内トップを切って大聖寺町が瀬越村を、片山津町が篠原村を編入しました。その後、動橋町と分校村が、山代町と勅使村・東谷口村が合併するなど、29年度末には、それまでの21町村から大聖寺町・山代町・山中町・片山津町・動橋町・橋立町・三木村・三谷村・南郷村・塩屋村の6町4村に整理されました。

57 加賀市の工場団地は、従来からの宇谷野工場団地と小塩辻工場団地に続き、現在、分譲を開始している（ ）産業団地の3ヵ所がある。

- ①新保^{しんぼ} ②片山津IC^{かたやまづ} ③伊切^{いきり} ④潮津^{うしおつ}

正答率 100%

加賀市には、現在、宇谷野工場団地と小塩辻工場団地、片山津IC（インター）産業団地の3ヵ所の工場団地があります。最も新しい片山津IC産業団地は新保町の農地3.6ヘクタールを造成し、令和2年から分譲開始したもので、小松空港や高速道路の片山津インターに隣接しており、幅広い業種の企業進出が期待されています。

58 当市では、もともと塩屋・橋立・（ ）の3地区に漁業協同組合が設置されていたが、昭和49年（1974）にこれら3漁協が合併し、「加賀市漁業協同組合」となった。

- ①伊切^{いきり} ②篠原^{しのほら} ③塩浜^{しおはま} ④黒崎^{くろさき}

正答率 70.6%

加賀市では、もともと塩屋・橋立・篠原の3地区に漁協が設置されていましたが、昭和49年にこれら3漁協が合併し、「加賀市漁業協同組合」が誕生しました。その後、平成18年には石川県内の27漁協が合併し、「石川県漁業協同組合」が発足し、加賀市漁協はその組織の中の加賀支所となり現在にいたっています。

59 山中漆器の生産額のピークは昭和63年（1988）で、この頃、生産額は400億円、事業所数は約700ヵ所、従業員数も（ ）人に達していた。

- ①2,000 ②3,000 ③4,000 ④5,000

正答率 23.5%

昭和30年代に入ると合成樹脂や化学塗料の新素材が導入され、安価で取扱いが簡便な実用品として新たな市場が開かれました。山中漆器の生産額のピークは、同63年で、この頃、生産額は約400億円、事業所数はおよそ700ヶ所、従業員数も5千人に達していました。

60 平成12年（2000）、加賀市・山中町・小松市・辰口町の4つの森林組合が合併し、現在の「かが森林組合」が発足した。さらに平成19年には（ ）森林組合もこれに加入した。

- ①能美^{のみ} ②川北^{かわきた} ③野々市^{ののいち} ④白山^{はくさん}

正答率 52.9%

当地の森林組合の歴史を見ていくと、平成12年4月に、これまでの加賀市・山中町・小松市・辰口町にあった4つの森林組合が合併し、現在の「かが森林組合」が発足しました。なお平成19年には白山森林組合もこれに加入しました。